

日本建築学会大会関連行事；
学生による語り合いのシンポジオン 2008 報告

「学生主体の建築活動：若者の活力を明日につなげる」

主催：中国支部

1. はじめに

住まいづくり・街づくり・各種建築の設計などに果敢に挑戦している若者は、多くの方への活動の理解を求め、多くの仲間との交流を求めている。このようなニーズに応える組織的な大枠の企画も最近充実しており、例えば、活動の評価に関するニーズについては研究発表やデザイン発表会などの発表の機会が多々ある。しかしながら、交流次元での発表についてはなかなかその機会が見当たらず、さらに発表会に適合する形態をとっていない活動や学校の課題制作という枠組みの活動については、その機会は少ない。

そこで、本シンポジオンでは、学生のそうしたニーズに応えるために、プレゼンと討議の場を交流という形で提供し、作品を介した学生間あるいは社会人との交流を語り合いとして実現させることにしたところ、広島地域の大学から学生5チームが話題提供し、構造系から計画系、街づくり系まで、多岐にわたり熱心に討議に花が咲いた。ここにそのときの様子を報告し、彼らの熱い思いを紹介することにした。

2. 概要とプログラム

会場：広島大学大学会館、日時：08年9月19日(金)15h-17h

発表学生：中国地区の大学、計5チーム

参加者：発表学生含めて60人

スケジュール：15:00-15:05 主旨説明、実施方法説明

15:05-15:45 各チームの発表(8分程/チーム)

15:45-17:10 自由討議、17:10-17:20 各チームまとめ3分、

17:20-17:30 全体まとめ



各チームのプレゼン



自由討議

3. 各グループの発表と討議

3.1 ひらくかとするか

～その1 都市の小学校のあり方～：近畿大学工学部 a チーム：為岡晃司、本間慎平、宮脇由佳、保田恵梨、(アドバ'伊'教員；市川尚紀)

◆発表概要

近年、構内に不審者が侵入し子供たちや先生方に危害を加えるという事件が相次いで起こっている。このため、これまで開放的であった学校が安全性を求めて、地域と遮断するという閉鎖的な対応をとるようになってきた。その一方では、学校は地域との融合をすべしといった声にわかに高まっている。私たちは、学校はひらくべきか、とじるべきかを根本的に考え、よい解決案をも模索することにした。そのためまず、既往の学校で、開放的か閉鎖的かを事例調査し、ここに問題提起することにした。事例は、y 大学付属小学校(山梨県)、千葉市立打瀬小学校、豊島区立池袋第三小学校、アーパスとが(富山県利賀村複合教育施設)である。

◆討議

Q. ひらくかとするか。なぜそれに関心をもったのか。A. セキュリティーと地域開放の二面に関心をもった。

Q. ひらいてとじては、小中高で違ってくるのではないのか。

各自の出身校ではどうでしたか。A. たしかにそのとおり、小学校は比較的ひらきぎみ。出身校では授業中はしめていた。

C. 昔に戻すのではなく今にあわせて考えるべし。地域にてひらくのもいいし、学校の一部をひらくのもいいし。

Q. 複合施設化の方向にという話は気に入った。今、ひらいた学校はあるのか。A. ある高校では閉鎖的であっても中は開放的であった。

Q. 学校に街中広場といったようなものでひらくことあると思うが。A. 普段とじているが、地域交流でひらくことが多い。自分の通った小学校がそうであった。

C. 市民や学校の教師に、そうした話をしてほしいですね。

◆まとめ。皆様から学校とその周囲の関係について意見をいただいた。校舎の建物をどうするのかは次の課題としたい。

3.2 ひらくかとするか～都市の水辺空間のありかた～

：近畿大学工学部 b チーム：上内陽介、土井裕佳、豊嶋一史、山路洋輝、(アドバ'伊'教員；市川尚紀)

◆発表概要

河川がまちに対して「ひらいている」か「とじている」かが地域性や親水性、利便性などにどのような影響を与えるのか。またそれぞれの利点と欠点は何か。実際に、自分たちで河川沿岸を調査し評価することにした。

調査対象の河川は広島市にある京橋川と元安川である。これらの河川では、90年に水の都整備事業が策定され、水辺の整備が進められてきた。今は水辺を市民により身近なものにするために、オープンカフェ、水辺コンサートなどのプロジェクトが開始された。

分析；「ひらいている」については、オープンスペースなどの水辺と人々のかかわりがたもたれる「親水性」に重点をおいたものといえる。人々の集いの場所になるというメリットがあるが、防災機能に関してデメリットもある。

「とじている」については、増水による水位上昇時の安全性などの「治水・流水機能」に重点をおいたものといえる。自然災害防止というメリットの有る反面、疎外感が生じ、風景への順応が乏しいと言うデメリットもある。

◆討議

C. 二つの川を比較してはどうか。なぜ川の周辺がこうなっているのかといったことを調べるともっといいでしょう。

Q. 川で魚釣りも可能なのはいいですね。遊歩道の使われ方はどうですか。A. 遊歩道は地域の人のみが歩いているが、その数は少ない。

Q. 居心地のよさについてどんな人のためのものか。観光客なのか。地元民なのか。

C. 神田川は街中で押さえ込まれている。地元民でも川の存在すら知らない。広島はそれでも開かれていていいですね。C. 広島の川、階段状の岸が特徴です。



水辺

◆まとめ。親水性を確保しつつ、迷惑行為や防災機能に関してどう考えていくかを課題としたい。

3.3 牡蠣殻で作るカルシウムイオン水を用いた強化靱性モルタルの最適配合について

:近畿大学工学部cチーム：菊池洋平、前山正光、藤原裕也、塩入慎太郎、(アドバイザー教員;森村毅)

◆発表概要

広島は牡蠣が名産であるが、大量の牡蠣殻をどのように処分するかが大きな問題となっている。健康食品の観点から牡蠣殻からつくるカルシウムイオンを取り出して利用することが大々的に行われているが、私たちは、牡蠣殻からのカルシウムイオンを含んだ水を使ってセメントモルタルの強度をあげることを考えた。大元のアイデアは森村先生のものであり、コンクリート強度の向上を検討している際にイオン水の活用を思いつかれたとのことである。先生のアイデアをもとに、牡蠣殻をすりつぶしてイオン水にしてからコンクリートにまぜてみると、確かに靱性が増加することが分かった。皆さんにはそうしたコンクリートの良さを知っていただき、積極的に使って欲しいと願っている。

◆討議

Q. コンクリートは塩分が入ると強度が低下する。牡蠣殻を用いる場合どうなのか。A. 牡蠣殻の塩分を取り除いているので心配はない。

Q. 経済性はどうか。A. 今、商品化に向けてがんばっている。

C. カルシウムイオンが入るとつやが出る。デザイン分野でこのことを活用してほしい。

◆まとめ;場違いかと思っていたが、皆さんがしっかりと聞いてくださったので、来て良かった。

3.4 身体経験が生み出す新たな空間の可能性について：大学とその周辺地域プロジェクトⅠ～五日市南中学校の図書館改修計

画;広島工業大学工学部：守本明夫(M2)、稲田徹(M1)、三次智史(M1)、大石将之(4年)、賀来剛弘(4年)、品川和博(4年)、白砂実(4年)、塚水徹(4年)、中野亮平(4年)、中村智久(4年)、東野克彦(4年)、山根祐宜(4年)、吉鶴雄太(4年)、(アドバイザー教員;栗崎真一郎)

◆発表概要

近年、あらゆる所であらゆるものがバーチャル化され、それが日常として受け入れられている。建築という舞台でもそうである。パソコンを使い、図面を引き、CGを用いて空間を把握し、思考を膨らませたりする。しかし、リアルな身体感覚が生み出す空間について考えたことがありますか?「杖を使い慣れた老人が、まるで杖の先まで感覚が伸びたように杖を使いこなすように」「居合いの達人が身体を超えた自分の間合いを持つように」身体の延長としての空間、身体の感覚を増幅させるような空間が存在しえるのではないかと考える。

私達のゼミでは、「そのような空間とは何なのか」ということについて考えている。また、身体を使ったものづくりに挑戦し、そうした身体経験のなかから、その感覚を掴もうとしている。今回はその挑戦の一つとして、五日市南中学校で行った図書室の改修計画〔図書室の床張り及びレイアウト変更、計画期間08年3月～7月〕についてプレゼンテーションする。

◆討議

Q. なぜ図書館の床を上げたのか。A. もともと空間があつて、それを使いたいと思っていたから。実体験で空間から触発された。たとえば、5cm天井が上がると雰囲気が変わる。目線の高さが変わるとすぐわかる。

Q. 最近の建築家は箱作りが多い。それを否定したいのか、それが主題なのか。A. そうだ。

Q. 視線線というか、目でみるのも常に触覚から何かを感じる。みるだけではなく、空間感覚を主張したいのか。A. 視線と空間とは別と考える。



図書館改修模型

3.5 ブートキャンプ2008 in 広島：広島国際大学工学部：吉村亮、宿利康介、波間宏、(アドバイザー教員;砂本文彦)

◆発表概要

今年(2008)8月3～5日に、地元広島の建築家である岩本秀三氏、小川文象氏、藤本寿徳氏を特別講師として広島国際大学に招き、建築ブートキャンプを開催した。建築ブートキャンプとは、卒業設計に取り組む4年生を対象に、卒業設計に求められるスキルの向上を目的としたもので、そのテーマについて3日間を使って集中的に議論、制作し、プレゼンを行うというものである。

今回、小川氏に『ガソリンスタンドのリ・デザイン』という

テーマを提示していただいた。1、2日目でA2用紙1枚、もしくは2枚のプレゼンボードと模型を作成し、そして最終日にコンペ形式で発表を行い、特別講師の先生方に講評、審査していただいた。3日間という短い期間ではあったが、今問題となっている自治問題について考え、深めることができ、大いに自分を成長させる結果となったと思っている。

◆討議

Q. 来ていただく建築家をどう選んだのか。A. みんなで建築家の誰を呼ぶかを決めた。

Q. なぜテーマがガソリンスタンドなのか。A. 身近なエネルギーの問題ということでガソリンスタンドとした。

Q. 建築家の方のコメントを教えてください。A. 社会性を考えよといったことをいわれた。

Q. 発表会の際の様子を教えてください。A. 現地選定を考えてエネルギー問題を考えるという負の認識。平和と戦争を容易に考えていると建築家から指摘をいただいた。A. 自分がやりたいと思うこと、好きな空間をイメージして社会的問題とが合わさるといい作品ができる。A. プレゼンボードについてのコメントが多かった。問題提起に対して解決がさまざまの指摘を受けた。

◆まとめ；学会の発表ということでなんとなく場違いかと思っただが、(そんなことはなく)来てよかった。



ブートキャブにおけるプレゼン ガソリンスタンド模型

4. 学生のコメント

さまざまな分野の学生が集まっており、建築と一言でいっても、多様な現象が集積されたものの集合のことなのだとしづりに感じました。

今回の趣旨に関してもっと気軽に考えていたなら、私も発表の場をお借りしたかったです。学生間での「今、何してる？」の話合いで十分だとわかりましたので、私も卒業設計の内容を話して、他大学の方がどのように感じるか反応を見てみたかった。

私の中で印象に残っているのは、他大学の院生の方々が実際に家具を作ったり、小学校の小規模リフォームの実験などで現実にもものを作ったりする作業を、自分も大学在学中にしてみたかったです。そのようなことを学生の間でやることは、大変大事なことなんじゃないかと思いました。

5. 専門家からのコメント

・学生諸君はたいへん自信を持って討議しており、実に生き生きとしている。平生とは違った良い一面を見させてもらった。がんばってください。

・シンポジオンの主旨がよくわからなかった。先月ゼミ配属したばかりであるので(多少なりとも心配であったが)、人前で学

生が発表できたことは良かった。学生諸君がよく準備してくれたので良かった。

・大学間で学生の交流の場がまったくない。その意味でいろいろな話ができてよかった。外に出て(ここに来て)おもしろかった。

・皆さんの話を楽しく聞きました。学生のみなさんは「何か」を感じています。その「何か」を大切にしてください。それを第一歩として、既存概念にとらわれず、自分を見つけ、まとめ上げて下さい。

・学生さんのグループによる発表と討議、それだけのことだけでなく、学部生が卒論や卒業制作を仕上げる前にこのような場を経験することの意味はとても大きいとあらためて思いました。

他の大学の学生さんたちの発表を聞く機会、他の大学あるいは建築の現場で仕事をしている人たちの意見やコメント、質問を聞く機会、正式に学会発表としてエントリーできるものに仕上げる前にこのような場を持つことはとても有意義だと思いました。そして、学生さんの発表を聞く側の私たちも、若い学生さんの素朴な発想、疑問等を指導教員等々の立場ではなく聞く場を持つことは、とても勉強になることだとあらためて思いました。このような機会が、もっとあちらこちらで、多くの学生さんに、そして私たちに与えられたらお互いに学びあえるのに残念に思いました。

6. おわりに

シンポジオンの主旨がなかなか理解されにくく、出席してはじめてわかるといった面がなきにしもあらずであったにもかかわらず、話題提供の学生に加えておもしろそうだからと集まっていた多くの学生諸君に、まずは感謝を申し上げます。

会場の学生の皆さんどおしで「今、何してる？」の語り合いが新鮮そのものであったのではないのでしょうか。こうした気楽な交流という次元での発表が、皆さんに楽しんでいただけたことが何よりの成果と考えております。皆さんにとって貴重な出会いであったことでしょう。今後も頑張ってください。

編集；森村毅(近畿大学工学部)、富樫豊(富山建築・デザイン専門学校)